

## パイデイア (Ⅱ)

——ギリシア文化を彩る理想の数々——

## ホメロス世界の貴族たちの文化と教育

アレーテこそは、あまねくギリシア文化が奉じる中心の理想であって、これをめぐってこれまでに学ばれてきた事柄は、ギリシア初期の貴族階級が営んだ生活——「ホメロスの」叙事詩に描かれた——を調べることで補足され、しっかりと例証されるのだが、そのような調べ上げは、さらに、すでに手にしている見解も確かめてくれるにちがいない。

ところで『イリアス』と『オデュッセイア』は、初期のギリシア文明がいかにあったかを告げる格好の歴史資料であると考えられるにしても、だからといって双方を、単一の詩人がまとめ上げた統一体などと考えるはならない。といっても実際には「ホメロス」という名は今日でも用いられ、古代の人びともやはりそうして、かれらは、同じこの名の下に多くの他の詩までしっかりと包摂させていた。古典期のギリシア人たちは、いまだに歴史感覚を十分に成熟させていなかったものの、それでもしかし『イリアス』と『オデュッセイア』を他の叙事詩群から切り離して、後者を、ホメロスに相応しくないと考えて放棄した最初の人たちであった。われわれの判断は、かれらの選別（Ⅱ『イリアス』と『オデュッ

セイア』を一括して捉える点)にも影響されるには及ばない。そうした選別は、歴史的伝統と呼ばれるものに固有の妥当性を欠いていて、一方の『イリアス』が『オデュッセイア』よりはるかに昔の作品であり、他方の『オデュッセイア』はもつとのちの文明段階を叙述していた点は、歴史的にも明らかにちがいない。

そのような事実が是認されるなら、双方の詩にしかるべき成立年代を割り当てる作業がわけても重要になるだろうが、この作業は、あえて語るなら、当の詩自体を単に吟味するだけではとうてい為しえない。そうした吟味にどれだけの知的な汗が流されようと、それらはすべて茫漠たる懐疑と曖昧に導くのみであったからである。ここ五十年にわたる発掘の数々は、なるほど、先史時代のギリシアについてきわめて多くを教えてくれ、わけても古えの英雄譚の歴史的基盤について、いつそう明かしてくれたのは否めないけれども、それでも、これを介して『イリアス』と『オデュッセイア』の成立年代を特定する貴重な助けが得られたなどと、とうてい断言することはできない。二つの作品は、その核となつてゐる英雄譚より後に創られていたからである。

当の詩自体の分析こそ、それゆえ、成立年代を特定する際の主たる導

き手にちがいない。しかるに分析は、元々、そうした目標に方向づけられず、むしろ、叙事詩の最終の校訂は比較的のちの時代になされた、という古い伝統に力づけられて、いまだに叙事詩が無数の独立した物語群の形で流布していた初期の段階を推測的に復元する、ことに向けられていた。すなわち分析は、そもそもの最初、純粹に論理的かつ美的な土俵で進められたが、これを、初期ギリシアに関する歴史知識にしっかりと結び付けたのは、ほかでもないヴィラモヴィッツであつて、問題点は今日、次のように絞られてよいかもしれない。歴史的分析はひたすら、『イリアス』と『オデュッセイア』を統一的なまとまりとして吟味するのに限られなくてはならないのか——これなら吟味を取り止めるに等しい——、それとも、その分析は、仮説的であらざるを得ない企て——にまで広げられ、異なつた時代層と性格層の混淆を「叙事詩の内部で」それなりに区分しなくてはならないのか、と。一例を挙げて指摘するならば、『オデュッセイア』をギリシアにおける初期の貴族社会の歴史記述と捉えて吟味するのは、そうした目的にわけても叶つた箇所があるろうことか前六世紀の中葉にまとめられたとすれば、おのずと不可能になるだろう。そうした見解は、果たして本当かな……といった単純な疑念だけで取り消せるものではなく、筋の通つた反論で応じるか、それとも、そうした帰結のすべてを受け容れるか、のいずれかしかない。もつとも、こうした問題があるからといって、二つの叙事詩をまずは美的な全体とみなすべきだ、という筋の通つた、とはいえないささか不満の残る主張まで——ホメロスの詩的価値を論じる上で何がしかは影響するかもしれないが——揺らぐことはないけれども……

当然ながら、わたしの手になる詩の分析を『パイデイア』でお見せすることはできないのだが、『オデュッセイア』の第一巻については、キルヒホーフ以来の批評家たちがこぞつて最も遅い挿入例の一つと解してい

たにもかかわらず、これが、単にソロンだけでなく、かれの執政官期（前五九四年）に先立つ時代のギリシア人たちにも——まことに当然ながら——紛うかたなきホメロスの作品であると考えられていた点を、それなりに実証できたと信じている。要するに第一巻は、少なくとも前七世紀にはホメロスの作品とみられていたわけである。ヴィラモヴィッツは、この主題に触れた最近の自著で、『オデュッセイア』自体は、前七世紀から前六世紀に及ぶ大々的な知的運動から何らの影響も蒙らなかつた、と述べているけれども、これなど、あくまでも仮説にすぎず、いくら本人が、後期のラプソディー（狂想詩）は実人生からかけ離れた術学的なものだと説いたところで、とうていその妥当性を保証できないだろう。現今の『オデュッセイア』にわけても目につく倫理的・宗教的な合理主義は、イオニアではさらに早い時期から始まつたにちがいない。というのも、前六世紀の初頭に勃興したミレトスの自然科学は、『オデュッセイア』に描かれた社会とも、さらには、そこでの地理的発想や政治的発想ともまるでそぐわない事象であつたからである。『オデュッセイア』はヘシオドス以前に、ほとんど今ある状態のままに存在した——わたしはこう信じて疑わないのだが、その一方で、こうも信じている。言語学的分析は、叙事詩の起源について幾つかの決定的な事柄を発見し、そうした事柄は、われわれの論理と想像がたとえ秘密のすべてを明かせなくとも妥当であることに変わりはない、と。学者であれば常に、実際に知られうるよりもいつそう多くを知ろうと欲するものだが、こうした野心はそれなりに許されてよく、とはいえ、そのゆえに当人の仕事の不評をこうむる場合もないわけではない。『イリアス』における「早期の」層と「後期の」層に——ここでのように——言及する書物であれば、今日、そのような言及内容を正当化する新たな議論をしっかりと保有してはならない。そうした議論は、なるほど『パイデイア』の前面に掲げられなかつ

たものの、それなりに提示はできたと信じている。全体として『イリアス』は『オデュッセイア』より遙かに昔の作品という印象が強いけれども、だからといって最終のスタイルへの到達まで、前者の方が、その姉妹版である後者より遙かに先であった、とまでは言い切れない。『イリアス』は、のちの叙事詩のすべてが構成の範と仰いだ見事な手本であったにしても、叙事詩という様式の方は、あくまでも特定の時代の所産であつて、まもなく、他の素材に合わせて自らを変容させたし、さらに、こうも付言されてよいからである。時代的に後の叙事詩は時代的に先のそれより芸術的に劣っているはずだ、などと考える輩は、ロマン時代とそれに固有の民衆詩概念が創り出した偏見に大きく毒されているのだ、と。かれらは、叙事詩の發展に幕を降ろした「編纂の時期」の詩的価値を過小に評価しているか、あるいはむしろ、編纂の時期の芸術的目標や方法を何とか理解しようと試みる代わりに、故意に、それらを軽視しているのである。ここにいう偏見からは不信も招き寄せられたが、これ自体は、いわゆる「常識」が学者の仕事とその批判意識に抱く基本のイメージであつて、つまりは、さまざまな学者の所見が——いつものように——互いに一致しない事態に基づいていた。学者なら、シリアスな問題に直面すると、くり返し原点に戻つて自らの仮説を吟味し直さなくてはならないものの、その際、ゆめゆめ懐疑に終止符を打つて最終判断など下してはならない。こうした主題に取り組む学者たちも、今や、かつての時代に為しえたように高々とゴールなど掲げられないだろうけれども……

古い方の叙事詩に目にされるのは、ひたすら戦争の世界であるのだが、こうした戦争は、ギリシア民族の大移動期に途絶えることがなかったのを忘れてはならない。『イリアス』は、アレテーという古えの英雄精神がほぼ全面的に支配していた時代を伝えていて、そこに登場する英雄の各々は、アレテーの理想を見事に体现していた。この作品では、冒険譚

の英雄たちを詩的に描写した古い中身と当時の貴族階級の生きた伝統がスムーズに混ざり合つて、不可分の一体をなしていたが、ここにいう貴族階級は、都市国家の組織生活の何であるかをすでに知つていて、それは、ヘクトルやトロイ人たちの叙述からも明らかにちがいない。『イリアス』全体を通して、勇敢な人間はすべからず貴族であり、まさに身分の高い人間であつた。そうした人間の最高の榮譽は、戦つて立派に勝利を取めることで、ここに、かれの人生のリアルな意味も絞り込まれていた。この作品はむしろ、扱われる素材の点で、他の何にも増して戦争型の生活を描かないではいられなかったが、対して『オデュッセイア』は、戦闘における英雄たちの武勇を描くような機会をほとんど持たなかった。ともあれ、二つの叙事詩の起源をめぐつて何かが立証されるとすれば、おそらく、もつとも古い英雄詩は、戦闘における英雄の武勇を讃えたものであつたこと、『イリアス』はしかも、その種の古詩の数々から素材を得ていたこと、であるだろうか。『イリアス』の展開内容には、古代の特徴が深く刻み込まれていて、そこに登場する英雄たちは、自らの高貴さを証明するにあたり、単に、激しい戦闘愛や名譽欲を口にしたばかりでなく、さらには、貴族階級の強さとまぎれもない弱さを含んだ一般行為——貴族であることを物語っている——も口にしていた。かれらが生きたのは、平時とは程遠い激しい戦いの場であつて、そこから離れた光景なら、たとえば、戦闘の小休止中の食事とか、生贄儀式とか、会議などが語られているにすぎない。

これに対して『オデュッセイア』では、まるきり異なつた光景が目にした。すなわち、英雄たちの帰還物語——ノストス——が、ごく自然な副作品としてトロイでの戦争物語に続いたからで、前者は、英雄たちが送る平時の生活を容易に叙述させることになつた。いうところの「帰還物語」は、驚くほど古い歴史を背負つていたが、時代も下ると、英雄

たちの生活における人間的側面——『イリアス』の血なまぐさい戦闘のおかげで脇に追いやられた——に主たる関心が移って、後代はむしろ、古い冒険譚の告げる登場人物や出来事にせつせと自らの生活を重ね合わせはじめた。『オデュッセイア』には、戦後の英雄たちの生活模様や冒険的航海、さらには、家族や友人たちに囲まれた穏やかな家庭生活などが活き活きと描かれているけれども、それらはすべて、当時の貴族たちの生活から——素朴なリアリズムに則って、当の舞台をより初期の時代に移していたとはいえ——示唆をもらっていた。この作品はだから、初期ギリシアの貴族文化がいかにあつたかを知る上で、われわれが頼つてよい主たる証拠にはかならない。ここにいう文化は、つまりはイオニア——『オデュッセイア』はこの地で創作された——に属していたものの、われわれの注目を集めているすべての点を勘案するなら、すぐれてギリシア的と考えられてよいかもしれない。はつきりと見て取れるのは、この作品に描かれた生活が、古い冒険譚から引つ張り出された詩的細目の寄せ集めなどでなく、当時の観察内容を記したリアルな何ものかである点にちがいない。叙事詩の伝統は、このような家庭場面の描写にいささかもモデルを提供せず、その主たる関心は、ひたすら、波乱に富んだ英雄たちとその行為に注がれていて、日常的な出来事を物静かに描き上げることになど向けられていなかった。平穩な生活という新しいモチーフは、単に、伝統的な帰還物語から導き出されたばかりでなく、さらには、もっと瞑想的で快樂志向的な、しかも、もっと泰平な時代の嗜好によつても選び出されていたのである。

『オデュッセイア』は、ある社会階級の全体に及ぶ文化——具体的には貴族という身分に規定されたそれ——を“生きた全体”として眺め、これをしっかりと描き出して、その点では、生活とその諸問題を芸術的に観察する方向への前進を明らかに画していた。この作品は、小説へ

と変貌しつつある叙事詩にかならず、そこに描かれた世界は、周辺部では、英雄たちの冒険譚や詩人の冒険的構想に彩られた“お伽の国”とも十分に溶け合っていたけれども、中心部では、リアリティの強い光にくつきりと照らし出されていた。もつとも、家庭生活を記述した部分でさえ、時として架空の要素を含んでいたのは否定できず、たとえば、メネラオスの宮殿や大金持ちのパイアークス人の王の館の溢れる豪華絢爛などは、オデュッセウスの館にみられる飾り気のない質朴と著しい対比をなして、それらは明らかに、偉大なミュケナイ王国の華美・華麗な伝統の数々から——おそらくはオリエント世界の壮麗さを告げる当時の伝承の数々からも——豊かな示唆を受けていたにしても、『オデュッセイア』から得られる貴族生活の光景は、まことに活き活きしたリアリズムに溢れていて、『イリアス』の与える光景からはつきりと区別されるにちがいない。すでに指摘したように『イリアス』が伝えるのは、大々的に理想化された貴族階級であつて、古い英雄詩から直接に取られた多くの特徴を具象化した想像豊かな描画にかならず、この作品を占有しているのは、英雄的伝統を形造つていた光景、すなわち、古えの英雄たちが示す超人的なアレテーへの大いなる賛美なのである。ここには、目下の『イリアス』が誕生したのは比較的のちの時代であつた、と告げるリアルな政治上の出来事など、わずかしが跡形を留めておらず、あえて挙げるなら、テルシテスのエピソードなど、そうした一例といえるかもしれない。かれは、貴族たちに向けた無礼な口調からも伺えるように、まさしく「向こう見ず」の典型であつて、ホメロスの全体を通して真に意地悪い唯ひとつのカリカチュアでもあつたが、あまねく事柄から推測されるのは、しかしながら、新しい時代がこのような攻撃を古い制度に加えはじめた時にも、貴族階級の役割はほとんど揺らがなかつた点にちがいない。対して『オデュッセイア』には、これとよく似た政治的刷新などま

るで跡形を留めていない。イタカの社会は、王の不在中、住民集会に取り仕切られていたが、それも、貴族たちの指導下であったし、パイアークス人たちの町は、一人の王が統治するイオニアのポリスをしっかりと真似ていたからである。もつとも詩人は、そうした貴族制度が社会・心理問題でもあると明らかに感じていて、いくぶんは距離を置いた関心で眺めていたから、この制度を、あくまでも客観的に——つまりは過不足なく——描き出すこともでき、ゆえにかれは、その名に値しない貴族の面々は鋭く批判しながらも、本当に高貴な情操とその文化に対しては、まぎれもない賛美をいささかも惜しんでいない。歴史を学ぶ学徒たちが、かれの証言を不可欠と位置づけるのは、そこに、貴族文化がしっかりと盛り込まれていたからにはかならない。

貴族階級は『オデュッセイア』では、自らの特権と絶大な命令力、そして、生活と行為における自らの洗練を強く意識した閉鎖的なカーストであった。『イリアス』では、大げさな情念、悲劇的な運命、途方もない登場人物たちが頻繁にその顔を覗かせたけれども、いつそう若い『オデュッセイア』に登場するのは、その大半が日常の平凡な人物たちで、かれらはそれぞれ、何かしら人間的で愛すべきところを具えていた。その話しぶりや行為には、レトリックを駆使するのちの批評家連中に「エトス」と称されたものが溢れ、相互の交わりのすべてに見事な洗練がしっかりと認められた。たとえばナウシカは、難破したオデュッセウスが全裸のまま庇護を求めて訪れた際、まことに分別ある仕方では招き入れたし、テレマコスは、父親の旧友メンテスと大いに優雅に言葉を交わし、ネストルとメネラオスの宮廷では親切なもてなしを楽しんでいるし、アルキノスは、高名な客人（『オデュッセウス』を心の底から迎え入れ、オデュッセウスも、別れに際して、かれとその女王に見事な返礼を怠らなかつたし、年老いた豚飼いのエウマイオスは、乞食に身をやつした主人（『オ

デュッセウス）に再会しても礼を尽くし、主人の若い息子テレマコスにも相応の礼を失さなかつた。そのような場面の数々を彩る深い精神的洗練は、別の場合に顔を覗かせる格式張った四角四面——慇懃な口調や礼儀正しい振る舞いを褒め称える社会では、いつも、そこでの生き方を特徴づけている——を見事に補完しているにちがいない。野蛮で傲慢な求婚者たちとテレマコスの会話でさえ、当人同士の憎しみにも拘わらず、申し分のない慇懃さをいささかも欠いていない。このような社会のメンバーなら、貴族でも庶民でも、すべからず不変の特徴を、すなわち、いかなる状況下でも礼節と見事な躰は徹底して維持するという特徴をしっかりと刻み込んでいた。求婚者たちの破廉恥きわまる振る舞いは、くり返し非難されているように、当人自身への、さらには当人の所属身分への許しがたい面汚しであつて、これに憤りを覚えない人間などいないだろう。その振る舞いは、だから、最後の最後にこつぱどく罰されたのだが、当の本人たちは、けしからぬ行為と係わつてくり返し非難されながらも、なおしかし、気高い面々とか、華々しい面々とか、雄々しい面々などと呼ばれていた。詩人はつねに、これらの面々が、身分と育ちに勝つた世襲貴族であるのを忘れてはおらず、それゆえ、与えられる罰もまことに厳しかった。犯した違反が、由々しさの点で二倍に相当したからで、その邪さは、貴族の名折れ以外の何ものでもなかつたが、そうした性質の悪さも、主役を務める貴族たちの煌びやかな慇懃にかき消されていた。主役たちは、考えうる限りの魅力と共感のすべてを兼備した姿で描かれ、貴族全体に向けた詩人の称賛は、面汚しの求婚者たちによつて、ほとんど影響を受けていない。ホメロスは、自らの描く男女のすべてに深い愛情を注いで、かれらのみせる優れた文化と高い洗練をしっかりと称賛したが、これは、作品のあらゆる箇所から読み取れるのではないだろうか。そうした称賛には、明らかに、教育的意図が込めら

れていて、かれは、英雄たちの「慇懃」を文句のない絶対価値とみなしている。それは、英雄自身が生きる上でのアクセサリー的な背景でなく、そもそもその卓越性を支える掛け値なしの要素なのである。かれらの生活を彩る諸々の様式とその尊重は、かれの見るところ、行為と切り離しがたく結びついていて、慇懃こそは、生き方の華にほかならない。それは、特別な卓越性をかれらに付与し、かれらは、堂々とした行為を介して、さらには、見苦しくない振る舞いを順境でも逆境でも変わらずに保つ中で、この卓越性をしっかりと証した。かれらは、神の意を体したから、あまねく人びとに勝って優遇され、神々も、かれらを保護して慈しみ、その人間としての価値は、気高い生活の中で見事に輝き渡ったのである。

貴族文化を成り立たせる前提条件はあくまでも三つ、すなわち、一定地域への定住と領土の所有と伝統の尊重であって、これらは、一連の生活様式を世代から世代に変わらない形で伝える基本要素にほかならないが、ここにはさらに「良き養育」も加え入れられなくてはならない。要するに、上品な作法や道徳を厳しく躰けて、若者を、貴族の掲げる理想に向けて意図的に教育する営みである。『オデュッセイア』では、同様の丁寧な礼節があまねく庶民にも広げられ、果ては門前の乞食にまで及んでいたし、さらには、貴族と庶民の間に深い裂け目など想定されていなかったし、主人と召使の間にも「家長—郎党」的な友愛と協働がはつきりと認められたのだが、それでも上流階級を別にすると、意識的な洗練や教育などどこにも目にされない。貴族階級を特徴づけるのは、いつの時代のどの民族にあっても、その「訓育」にほかならず、要するに、賢い方向づけと絶えざる助言を介して人格そのものを慎重に形造っていく営みを措いてないのである。貴族こそは「全き人間を造り上げる」と公言してよい唯一の階級であって、そうした公言は、ここに掲げた完全な目標に向けて人間の基本的資質のすべてを立派に磨き上げてこそ、はじ

めて正当化されるにちがいない。若者は「樹木のように伸び伸びと」育つて、祖先の定めた社会的・道徳的な規定を身に付けるだけでは十分といえず、貴族階級の優れた身分とその価値は、つまるところ、そのメンバーを順応性に溢れた若い間に、階級の容認する理想に向けて妥協なく形造るといふ義務にこそ基づいていた。このプロセスを経て、はじめて教育は「文化」の名に値するものに、すなわち、人格全体を特定の型に合わせて鑄造していく過程（「文化」になるのだった。ここにいう「型」が、いかなる文化の発展でもどれほど重要不可欠であるかを、ギリシア人たちは常に感じていたが、これ自体は、どのような貴族文化でも本質的に異ならない。たとえ理想の型が、ギリシアにおける「カロカガトス（美にして善なる人間）」であつても、あるいは、中世騎士道の「コルテシア」であつても、さらには、十八世紀の肖像画を通してお定まりの微笑を投げかけるあの社交的優雅さであつても・・・

戦場での武勇という伝統的理想は、『イリアス』と同じく『オデュッセイア』でも、やはり雄々しさの最高の基準となっていた。とはいえ『オデュッセイア』は、これに劣らず、知的・社会的な徳の方もしっかりと称揚していて、この作品の英雄（「オデュッセウス」）は、当を得た言葉や抜け目のない計略にまるで事欠かない。当人の主たる長所はその抜け目のなさにあつて、かれは、豊かな実践的洞察を駆使して自らの生命を救い、待ち伏せる危険や強力な敵を凌いで見事に帰郷を果たしたのだった。ギリシア人たちは——わけても本土の面々は——この手の理想を受け容れるにあたってかなりの抵抗を示したが、当の理想は、ホメロスという一個人の手になるものでなく、数世紀に及ぶ長い体験が積み重なって生み出されたものであつた——そのゆえか、あちこちに内容的矛盾が目につくのも否めない——。抜け目のない漂流の冒険家のオデュッセウスという肖像は、イオニアの水夫たちがあまねく大洋に漕ぎ出した時代の所

産であつて、そのかれがトロイ冒険譚と結びつき、わけても、イリウム（「トロイ」）の攻略に大きな役割を演じたことで、当人の性格も、おのずと華々しい脚光を浴びることになった。かれは、『オデュッセイア』でまことに上品に振る舞っているが、これなど、詩の設定した当人の社会環境——詩を生んだ土壤でもある——から来るのではないだろうか。主役を務めるオデュッセウス以外の人物たちでも、強調されているのは同じく、英雄的な資質でなく人間的な資質の方であつた。あくまでも優位を訴えていたのは、常に、かれらの知的・精神的な側面であつて、テレマコスなら、しきりに「慎重な」とか「繊細な」などと称され、メネラオスの妻なら夫を自慢して、心の点でも身体の点でもわが夫はアレテーを欠いていないと口にし、ナウシカなら、正しい分別を無くしたことはないといと語られ、ペネロペなら、賢くて慎重な女性として記述された。

このような貴族文化の只中で、女性はどうのような影響を教育的に受けたのだろうか。これについても一言すると、まず、女性の実質的なアレテーはその美しさにあつて、この点は、男性の価値が、知的な卓越性と肉体的なそれで測られていた事実からも納得されるにちがいない。この時代のギリシアにおける女性の美への崇拜は、あまねく騎士道時代を彩った上品な洗練とも同一線上にあつたが、女性はしかし、ただ単に、ヘレネやペネロペのようなエロスの称賛の理想目標であつたばかりでなく、さらには、家事全般を取り仕切る女主人として不動の社会的・法的な地位も占めていた。ゆえに女性の徳は、淑やかな慎ましさとやりくり上手に絞り込まれて、ペネロペも、自らの知恵と貞節とやりくり上手で大々的に褒められていた。他方、ヘレネの美貌は、トロイの上に途方もない災厄を招いたけれども、その姿を目にしたトロイの老人たちは、手にした武器を捨てないわけにはいかず、かれらは、輝くばかりの美に接して、蒙つた不幸の数々をすべて、ヘレネよりも神々の責にしようとい

心した。かの女は、トロイが陥落してのち、最初の夫と一緒にスパルタに帰つたが、そうしたヘレネを『オデュッセイア』は、あまねく高貴な淑女たちの鑑であり、社交的な優雅さの見事な手本であると記している。かの女は、若い客人テレマコスとの会話を見事にリードして、自己紹介を受ける前ですら、あなたにはオデュッセウスに驚くほど似ていますねと優雅に言及し、いかにも如才なく、社交術の完全な習得ぶりを披瀝したからである。まっとうな主婦なら、決まって、自らの糸巻き棒を携えて登場するものだが、ヘレネの侍女たちも、男たちの屯する広間に足を踏み入れて席に着いたかの女に、いつも、そうした棒を手渡していた。ヘレネの場合、その裁縫箱は銀製で、糸巻き棒も金製であつたけれども、これらは、高貴な淑女の身を飾る数少ない品にほかならない。

女性たちが占めた社会的地位は、ギリシア史上のあまねく他の時代にまさつて、ホメロスの騎士道の終焉期にいっそう高かつた。パイアクス人の王の妻であつたアレテは、男たちの間で「女神」のように奉られ、かの女が登場したのみで、男たちの論争はピタリと止んだし、そのアドバイスは、夫の思案をも左右した。漂流中のオデュッセウスも、イタカの故郷に送り返してもらうべく相応しい保護を必要とした時、ナウシカの助言を容れて、その父親の王には訴えないで、母親の王妃の膝をかき抱いて哀願した。自らの願いが聞き入れられるか否かは、ひとえに、かの女の好意の獲得に掛かつていたからである。ペネロペは、夫を欠いた八方塞りの中で、騒々しい求婚者たちに囲まれつつ、女性にふさわしい敬意はすべからず払われるのだ、と固く信じて疑わなかつたから、何とか立ち回ることでもできた。ホメロス世界の紳士たちは、あまねく淑女たちに接するにあたり、懇勸さをいささかも欠かなかつたけれども、それは、古い伝統を誇る貴族文化と高度な発展を遂げた階級教育のおのづからの所産であつた。女性に払われた敬意は、ただ単に、かの女が分担

する有益な仕事——ヘシオドスの描く農民生活にみられたような——に基づいたわけでも、さらには、家名を絶やさぬように跡継ぎの子をしっかりと産む母親としての立場——のちのギリシアの都市生活にみられたような——に基づいたわけでもなく、ホメロスの貴族は、女性そのものを、高い道徳性と古い伝統の生きた収蔵庫として大いに褒め称えた——もつとも、家系の純な点をわけても強調する貴族階級なら、おのずと、次世代の母親である女性を敬わないわけにはいかなかったろう——。本当の意味における女性の精神的權威はまさにこの点にあつて、それは、男性のエロスの振る舞いにも少なからぬ影響を及ぼしていた。『オデュッセイア』の第一巻は、この作品のもっと古い部分より道徳觀念の点でいっそう洗練されていたが、そこには、当時の性倫理を記述した小箇所があつて、オデュッセウス家に仕える信頼厚い老侍女のエウリュクレイアが、明かりを手にテレマコスを寝室まで案内した際、詩人は、叙事詩の作法に則つて、かの女の身の上を簡単にこう解説していたからである。老ラエルテス（＝オデュッセウスの父で、テレマコスの祖父）は、いまだ少女であつたかの女を高い値段で買い取つて、生涯にわたつて家に留め置き、妻と同様に厚く遇したものの、決して褥を共にすることはなかつた。妻の怒りを極度に恐れたからである、と。

これに対して『イリアス』に登場するのは、もつと洗練度を欠いた発想の数々であつて、たとえばアガ멤ノンは、戦利品として得たクリュセイスをギリシアに連れ戻らうと心に定めて、軍事集会の席上こう宣言した。この女には妻のクリュタイムネストラ以上に惹かれていて、というのよかの女は、容姿と体格の上でも、さらには機転と手際の上でも決して妻に劣らないのだから、と（なお、古代の注釈家たちは、「容姿と体格の上でも、さらには機転と手際の上でも」という一行に、女性のアレテーのすべてが記されていると観察した）。ここにみる高飛車な決心は、たしかに、アガ

メムノンの個人的性格に因つたかもしれないが、あらゆる配慮を脇へ押しやる横柄な気風は、この作品の他の箇所にも目にされないわけではない。たとえば、ポイニクスの父親アミュントルは、愛人をめぐつて息子と諍いをくり返し、この女のために妻を見捨てたところ、怒りに駆られた妻は、息子を唆してこの女と愛を交わさせ、ついにはアミュントルとの仲も引き裂いたのだが、注目されてよいのは、こうした事態が平時に生じていて、戦場での荒んだ兵士たちの振る舞いではなかつた点である。これに比べると『オデュッセイア』に描かれた道徳性は、全体的にみて『イリアス』より遙かに高い地平を物語つていた。オデュッセウスとナウシカの見事な会話において、あまたの体験を刻んだ男が率直かつ分別ある仕方でも純心な乙女に語りかける時、どれほどの優しさと洗練でもつて英雄が女性を遇するのが、しつかりと目にされるにちがいない。ここには、本当の意味での「内なる文化」が愛情たつぷりに、まさしくそれ自体のために描き出されていた。そうした事例として、他にもたとえば、アルキノスの庭園の美しさやその宮殿の華やかさ、あるいは、カリュプソの離れ小島のメランコリックな愛らしさ、などが挙げられるかもしれないが、これらの全部に基本的に目にされる品性の高い優美さは、女性が、戦争に明け暮れる殺伐とした男性社会に及ぼした教育的影響にちがいない。最後に、英雄オデュッセウスと友の女神パラス・アテナの親しい交流など、この世の試練の数々にすぐれた靈感と導きを与える女性の力のすばらしさを描いた最も美しいスケッチといえないだろうか。

ホメロスに描かれた貴族階級にどうした文化が広まっていたかを具体的に考察したいなら、何も、上品な作法や道徳の数々を折に触れて描いた記述箇所のみ証言を求めする必要はない。二つの叙事詩それぞれ自体が、若い貴族たちの教育を生き活きと叙述していたからである。とはいえず、道徳的洗練の強調」といった教育問題への意識的な関心は、作品の新しい



層にひたすら限られていたので、われわれも、これに準じて『イリアス』の後の成立部分を『オデュッセイア』と一括して扱わなくてはならないだろう。やがては扱うことになる「テレマキア（テレマコス物語）」は、この場合の後者を代表し、対して『イリアス』の第九巻は、この場合の前者を代表するのだが、ここでは、老翁のポイニクスが、若き英雄アキレウスの傍らに家庭教師兼助言者として配置されて、このような取り合わせ——作品の本体より後に生まれた点は否めない——は、作品全体を眺めてもとりわけ優れた場面の一つにちがいない。『イリアス』に登場する英雄たちは、すべからず、戦士以外の何ものでもなかったと想像され、いかなる読者であれ、かれらがどのように育てられ、両親や指導者の先見の明に導かれて、はるか子供時代から将来の偉業と英雄的完成に向けてどのような道を歩んだかなど、あえて自らに問うこともなかったが、そして、作品の元となった伝承も、いうまでもなく、こうした問いにほとんど答えなかつたけれども、封建精神は、偉大な英雄たちの系譜に向けた尽きざる関心に促されて叙事詩の分枝を新しく考案し、かくして、今は年老いた偉人たちの若い時期の教育歴がしかるべく創り上げられたのであった。

英雄たちの教師を務めたのは、主として、テッサリアに聳えるペリオンの山の緑なす峡谷に住まう知恵あるケンタウロス（半人半馬）のキロンであった。古い伝承も告げるように、有名な英雄たちの多くがキロンの弟子であつて、ペレウスも、妻のテティスに見捨てられてのち、息子アキレウスの後見人にキロンを選んでいた。初期の頃には、叙事詩タイプの子の教訓詩に、驚くなかけキロンの名が冠され（キローノス・ヒュポテカイ）、示唆に富んだ韻文調の金言——おそらくは貴族社会の伝統に端を発していた——が語りかける直接の相手も、ほかでもないアキレウスであった。古代においても、そこには、今と同じくヘシオドスのものとされるよう

な格言的な決まり文句がたつぷりと詰め込まれていたのだから、その中身は、残された数少ない詩句から、とうてい満足になど再現はできない。ただしピンダロスは、その詩を大いに強調していて、ゆえに、中身の貴族的性格ならそれなりに証拠立てられるかもしれない。かれは、後天的な教育と先天的資質の関係をめぐる新たなより深い見解を代表して、英雄的なアレテーを形成する上で、単なる教育などほとんど役に立たないと考えていたが、その一方で、冒険譚の伝統に敬虔な信も置いていた手前、古えの偉人たちは英雄崇拜で心を満たした教師たちの手で育てられた、と告白しないわけにはいかなかった。かれは、時には素直にこの点を認め、時にはその否定に躍起となつたけれども、少なくとも、こうした伝統——明らかに『イリアス』よりも古かつた——がすでに定着していた点のみは了承していた。『イリアス』の第九巻をまとめた詩人は、キロンに替わつてポイニクスをアキレウスの教師に定めているが、他の箇所には、こうも記されている。パトロクロスは、戦士の傷に特効薬を塗つてほしいと請われたが、この薬はアキレウスから学んだもので、さらにアキレウスは、ケンタウロスの中でも最も公明正大なキロンから学んだのだつた、と。キロンの教えは、ここでは医療分野に限られてい

る——当人は、周知のように医神アスクレピオスの師であつた——が、ピンダロスは、医薬の点でも、あまねく高次の騎士的技芸の点でも、ともにかれをアキレウスの師と呼んでいて、これが実は、元々の中身であつたにちがいない。「アキレウスへの使節」の箇所をまとめた詩人は、しかしながら、アキレウスを宥めに向かうオデュッセウスとアイアスの傍らに、半人半馬のケンタウロス（＝キロン）など据えることはできなかった。あまねく英雄たちの中でも最大の英雄にふさわしい教師は、やはり同じく騎士的英雄でなくてはならない——これが、かれの考えであつて（かれは、しかるべき理由がなければ、とうてい冒険譚の伝統を捨て去れなかつたか

ら、おそらく、自らの実験に照らして内容上の変更を加えたものと思われる）、キロンに替わって選ばれたのは、ほかでもない、ペレウスの従者でドロピア人の王子であった老翁ポイニクスであった。

ところで、使節の場面におけるポイニクスの会話について、ひいては『イリアス』に二度とその顔を覗かせないポイニクスという人物全体についても、これまで、大きな疑いが投げかけられてきた。すなわち、この場面にはもつと古い形態が在ったはずで、ここでは、軍隊の依頼でアキレウスの下に派遣された使節は、オデュッセウスとアイアスのみであったにちがいない、と。この点に関しては、まぎれもない証拠もあったのだが、だからといって、ポイニクスの偉大な訓告調の会話を単に削り落としただけで、元の古い形態が再現されるわけではない。この箇所のように、改訂の痕跡がまことに明らかな場合ですら、その再現はたいがい不可能なのである。なぜなら、この作品の今ある形態では、老齡の教師ポイニクスの性格は、先にも見たように、二人の使節と密接に関わり合っていたからである。アイアスは、ポイニクスが掲げる教育理想のうち行為の側面を、オデュッセウスは、もう一方の会話の側面をそれぞれに体现して——アキレウスのみは、これらの側面をともに体现して、身体面での最高の力と精神面でのそれが、かれの中では見事に調和していた——、それゆえ、ポイニクスの会話にいらぬ口を挟むと、その影響は二人の使節の会話にも及んで、つまるところ、この場面の芸術構造の全体を壊してしまうにちがいない。

ところで、先のコメントの愚かしさは、別の仕方でも証明されるだろう。すなわち、ポイニクスの会話がのちの挿入であったという一般説明は、この場面の詩的意図を完全に誤解した結果にほかならない。問題の会話は、驚くばかりに長くて、ざっと百行以上にも及び、そのクライマックス——注意力に欠けた読者には、主たる狙い——と取り違えられがちな

——は、メレアグロスの憤りの箇所であったから、批評家たちは、おしなべてこう想像した。詩人は、アキレウスの憤りを描くにあたり、メレアグロスの憤りという古い物語を手本にした、この箇所にはだから、元の物語が——ギリシアの作法に則って文学的に仄めかしながら——表示され、そこでの抜粋文も古い叙事詩から直接に取られていた、とである。われわれとしては、メレアグロス物語の詩的改訂が『イリアス』第九巻のまとめられた時代にすでに存在したとも、あるいは、これ自体が口述的伝承を純粹に写したものであるとも、いずれを信じるも——はたまた信じないも——自由であるのだが、少なくとも次の点は、すなわち、ポイニクスの会話が、教師から弟子に向けたプロトレプティコス（訓話）風の演説のモデルであって、メレアグロスの憤りとそれが辿った悲惨な結果を長々と述べた説明は、『イリアス』と『オデュッセイア』の会話中にくり返し登場する神話的実例の一つであった、のだけは信じないわけにはいかない。あらゆるタイプの訓戒的会話に共通した主たる特徴は、いわゆる教訓的実例の紹介であって、メレアグロスという訓戒的実例は、老齡のポイニクスの口から語られたからこそ、この上ない効果も發揮できた。老翁がみせる私心のない忠誠と献身に、アキレウスも、まるで注文を付けることができなかったからである。ポイニクスであればこそ、オデュッセウスがあえて口にできなかった真理も堂々と口にでき、英雄の頑なな意志を何とか転じようとする最後の試みも、ポイニクスが試みたからこそ、その意味もさらに深まって重要度を増したのだった。これの失敗はだから、アキレウス自らの憤りと頑なさの悲惨な結果として、悲劇のクライマックスを迎えるほかはなかった。

この箇所は、『イリアス』のいかなる箇所にもまさって、世の悲劇詩人たちが導き教える人物こそホメロスなのだ、と述べるプラトンの言葉を裏書きしているにちがいない。この点は、古代の人たちもしかと実感し

ていた。こうした場面のおかげで、作品全体の基本線は、倫理的・教訓的な方向に大きく転換し、メレアグロスという実例を介して、ネメシス（妬み）という基本的な道徳原理もつまりは訴えられたのだし、この場面に促されて、あまねく読者は、アキレウスの決定——ギリシア軍の運命と親友パトロクロスのそれ、そして最後にはアキレウス本人の運命も左右した——がもつ意味を十全に感じ取ることもできたし、この場面に導かれて、アキレウスの憤りは、普遍的な問題と評されるようにもなったからである。目下の完全な形態での『イリアス』をわれわれに伝えた詩人は、この場面を介して、アテー（破滅へと導く狂気）という強力な宗教概念を呼び起こした。そのアテーは、不気味な幽霊さながら、リテー（嘆願）とそれを拒む頑なな人間心といった別種の威圧的な道徳寓話の背後から、半透明な姿で立ち現れてきたのである。

以上に紹介してきた中身は、全体として、ギリシア教育史上にわけても重要な位置を占めていた。そこには、古えの貴族的訓育の底にある「不変の型」としての理想が示されていたからである。アキレウスがいまだ戦闘行為にも雄弁の術にも等しく未経験であった頃、父親のペレウスは、最も信頼の置ける家臣を遣わして、戦場と法廷における息子の心強い道連れとし、雄々しさという伝統の型に合わせて息子を教育させようと思いついた。その役目には、長年にわたるアキレウスへの忠実な奉仕に鑑みて、ポイニクスが抜擢された。かれの奉仕は、いうならば父親的な愛の延長にほかならず、この愛を介して、当の本人は若い英雄と固く結び付いていたから、かれはまた、感動的なセリフに訴えて、アキレウスをはるかな子供時代にまで導きながら、ポイニクス以外の傍らでは食事もできなかった本人が、ペレウスの大広間での夕食の席上、かれの膝に抱き上げられた情景をまざまざと思い浮かべさせることもできた。その上で、こう告げたのである。あなたのために目の前でどれほど肉を細かく

切り分け、甘美なワインに満ちた杯をお渡ししたとか、「しかるにあなたは、とんでもないお馬鹿さんぶりを発揮して、しばしば、せっかくのワインを吐き出して、わたしの衣の胸元を濡らしましたっけね」と。実のところポイニクスは、父親の呪いのせいで子供が授からず、アキレウスを常々「実の息子」とみなしていたから、密かに、老齢の折の孝養のお返しを期待していたのだが、そのかれは、ただ単にアキレウスの教師であり半ば父親的な友人であったばかりでなく、さらに加えて、道徳的な自己鍛錬というより深い問題に向けた卓抜な指導者でもあった。古い伝承の中で不滅の域にまで達した面々は、そのような自己鍛錬の「生きたモデル」にほかならない。かれらは、超人的な強さと勇氣に富んだ見事な英雄であったばかりでなく、加えて、日々の深まりゆく新たな体験の数々に鼓舞され活気づけられた生身の人間でもあって、その体験は、古い貴族的伝統をくぐり抜ける中で、永遠に鮮度を失わない確かな意味をそこから汲み出したのであった。

詩人は、ポイニクスという人物を介して、不滅の域に達した高尚な教育をあらゆるさまに称賛していたので、文句のない英雄であったアキレウスが辿らないわけにはいかなかった運命は、その目に、由々しい問題と映らないわけにはいかなかった。われわれ人間を増長させて破滅に導く女神アテーの抗しがたい非合理な力を前にすると、いかなる教育的工夫も、さらには、いかなる励ましもおよそ太刀打ちできない以上、詩人は、高次の理性に訴えた工夫や申し開きを、思いやりに溢れた半神的ダイモンの姿に実体化して、ビッコで足の遅いこれらダイモンに、足の速いアテーの跡をゆつくりと追わせて、アテーが撒き散らした災厄の数々をきつちりと繕わせようとした。これらのダイモンこそ大神ゼウスの愛娘にほかならない。かれらが近寄ると、人間はすべからず、敬いながらその声に耳を傾けなくてはならず、そう対応されると、かれらも友好的に

振る舞って、惜しみなく援助の手を差し伸べるだろう。けれども、もしも人間がこれを拒んで、心を強張らせて祈りを怠ったなら、かれらは、いささかも手加減せずにアテーを送りつけたから、当の本人は、その咎を自らの破滅で贖わなくてはならなかった。善きダイモンと悪しきダイモンが、人間の心を勝ち取るうとくり広げる無類の争いをこのように活き活きと描き出すことで、詩人は、そもそも何を訴えようとしたのだろうか。それは、盲目の情念と高次の明察がくり広げる——あまねく教育問題の中でも最も本質的で深刻な——内なる葛藤を描いてない。そうした場には、自由意志とか、選択とか、罪などの近代的観念が持ち込まれてはならない。古えの観念は、遙かに広くて悲劇的であった。すなわち、そこで論じられていたのは『オデュッセイア』の冒頭と同じく、罪とか責任などの問題ではなく、実際に目にされたのは、古い貴族階級の活力に溢れた実践的な教育的発想が、最初に顔を覗かせる『イリアス』においてさえ、いかなるタイプの教育でもそれなりの限界を携えているという真面目な自覚としっかり溶け合っている光景であった。

情け容赦のないアキレウスの対極に位置するのが、ほかでもない温厚なテレマコスであって、当人の教育のいくばくかは『オデュッセイア』の第一巻にもそつと示されていた。アキレウスは、ポイニクスの教えを拒んで、空しく滅び去ったけれども、テレマコスは、父親の友人メンテスに扮した女神アテナの助言——自身の心に浮かんだ中身とまったく同じであった——に喜んで耳を傾けた。かれこそは、経験豊かな友人の助言を容れて栄光にまで上り詰めた素直な若者の典型にはかならない。アテナ——ホメロスの信仰では人間を幸多い冒険にいざなう女神——は、これに続く巻では、年長の友人メントールに扮して、テレマコスに伴いつつピュロスとスパルタに旅立っていて、そこには、貴族の若者がわが家をあとに旅に出た時、漏れなく、守り役が付けられた当時の習慣が

そつと映し出されていた。メントールは、弟子の辿るあまねく歩みをじつと見張って、事あるごとに、親切な言葉と適切な助言でしつかりと援助し、新たな難局にぶつかつた際には、どう振る舞うのが上品なスタイルであるかを教授した。すなわち、ネストルやメネラオスなどの老貴族にはいかに話しかけるのが妥当で、自らの要求を通すにはいかに振る舞うたらよいか、等々を具体的に伝えたのだつた。フェヌロンの『テレマコスの冒険』が公にされて以来、メントールという名は、年老いた忠実な導き手で、哲学者で、しかも友人の三位一体を代表するものとなつたが、テレマコスに抱く当人の愛は、弟子に抱く教師の愛を見事に具体化してはいないだろうか。

テレマキア（テレマコス物語）の全体をしつかりと貫流していたこのような教育的モチーフは、さらに詳しく吟味されてしかるべきかもしれない。ここでの詩人の意図が、貴族生活に係わる若干の場面を単に書き記すだけになつたのは、改めて断るまでもない。まことに魅力的な記述自体が実際に核とした（あるいは核としようとする）のは、オデュッセウスの年若い息子を、本当の意味での、思慮深い人間——その高尚な意図が見事に結実して気高い業績となるような——にまで改変する問題であった。『オデュッセイア』を一読したなら、この作品が、全体として確かな教育的意図を具えているなど感じないわけにはいかない。この点は、具体的な痕跡を多くの箇所を求めるわけにはいかないけれども、そうした印象（＝教育的意図の具備）は、つまるところ、テレマコス物語を彩る外的な出来事と同時進行する、内なる葛藤とその発展という普遍的局面に大きく由来したのではないだろうか。外なる出来事が本当に構想し、そうした出来事の真のクライマックスであつたもの——それは、内なる葛藤とその発展を描いてない。

『オデュッセイア』の起源をめぐって批判的に論を展開する中で、ある

注目すべき問いが登場してくるにちがいない。すなわち、テレマキア（テレマコス物語）はある時期に独立詩として存在したのか、それとも、われわれが現に手にしている叙事詩の一部として始めからまとめられていたのか……。この問いは、さしあたりは手を着けずに残しておくほかはないのだが、たとえある時期にテレマコスという独立詩があったにせよ、冒険譚のこの部分が、いかなる理由で、独立して仕上げられたのかを説明しようとすれば、おそらく、そうした独特の主題に聴衆が大きな関心を寄せていたから、と語る以外にないだろう。教育という問題に多くの考察のエネルギーを割いた時代は、おのずと、それが盛り込まれ具体化される伝承教材を研究し、これをさまざまに展開しないでは済まない。しかるに伝承は、テレマコスがいつ生まれ、どうした家庭に育ったかのあからさまな事実を別にすれば、実り多い想像を掻き立てる具体的事実の芯を何ひとつ与えてくれなかったもので、詩人は、テレマコスの若者時代をそれ自体の論理に沿って展開し、ある見事な工夫の下に、これを『オデュッセイア』の中に組み入れた。すなわち、オデュッセウスとその息子——一方は、四方を海に囲まれたカリュプソの小島に隔離され、他方は、なすすべもなく父親の帰りをひたすらに待ち侘びる——といった互いに独立した二人を徐々に結び合わせる巧みな工夫を凝らして……。かれら二人は、同時に互いに向けて動きはじめ、英雄はついに、自らの受け入れを整えた自宅に帰りついたので、そうした筋書きは、当時の貴族生活を背景としてくり広げられた。テレマコスは最初、ほんの少年であつて、母親に求婚する横柄な面々に前にも手も出せない。無礼きわまる連中の行為をあきらめの顔で見守るほかはなく、意を決して阻止する力強さも持ち合わせていない。温和ではあるが非力なこの若者は、持つて生まれた貴族的典雅さのゆえに、わが家を滅ぼす面々に立ち向かうこともできず、ましてや、暴力に訴えて自らの権利を押し通すなど思いも

及ばない。ひたすらに受動的で、愛想はよいが柔弱で、なす術もなく不平を漏らしている当人は、このままでは、求婚者たちと孤独な戦いをくり広げ、究極の危険を賭けて最後の復讐に取り組むべく帰国の途にあつたオデュッセウスが手を組む相手として、とうてい役に立たないだろう。そのようなテレマコスを鍛え上げて、あえて事をなす覚悟のできた強い決意の人間にまで、すなわち、そうした最後の戦いにふさわしい相棒にまで育て上げたのは、他でもないアテナであつた。

われわれはこれまで、『オデュッセイア』の二、四巻に登場するテレマコスという人物が、それと意図された教育目標に叶うように設定されている点を何とか示そうと努めてきたが、これに対しては、ギリシアの詩人は登場人物の内的発展などまったく描いていない、という反論も見受けられないわけではない。なるほどテレマキア（テレマコス物語）は、教育の問題を取り上げた小説などではなく、テレマコスという人物にみる変容も、とうてい、今日的な意味での「発展」とは言いがたい。古代の人物とは、ここにみる変容を、神の靈感による御業と考えたけれども、その靈感はしかし、テレマコスには、たとえば神の命令とか、神が与える夢（＝正夢）といった通常の叙事詩スタイルで生じたものではなかった。すなわちそれは、白々しい詩的仕組みやあやふやな魔法の類いではさらさらなく、ここにいう神の恩寵は、まことに自然かつリアルな仕方です。つまりは、この若者の意思と知性をじっくりと感化して、その心を意識的に調教するという形で与えられたのだ。そうした調教が施されると、自らの仕事に向けて足を踏み出すのに、あとは、決定的な外的動因のみで十分であつた。詩人が思いを巡らしているのは、テレマコスに作用した各種の要因——当人の未熟で方向の定まらない衝動、生来の優れた人柄、女神の恩寵と支援、ついには行為に踏み切らせた神の導き——間の絶妙のバランスにほかならない。これらの繊細な釣り合いは、詩人が、

自らの問題をいかに深く理解していたかを何よりも物語るにちがいない。女神アテナを、年老いた客友のメンテスに扮させ、テレマコスに語りかけさせるという叙事詩の通例に従って、かれは、女神の聖なる介入行為を、若いテレマコスの性格に及ぼす教育の自然な感化作用に無理なく一体化させたのだった。そのような工夫がまことしやかなのは、詩を読む際に覚える「なるほどな」といった得心感情、より具体的には、教育という行為——若者の魂の諸力を解き放ち、魂を妨げる拘束の数々を打ち壊して、魂そのものを歓喜の活動に導くところの——はそれ自体が神の促しであって、まさしく自然の奇跡なのだ、という一般感情のしからしめるところである。アキレウスの老教師が、悲運の英雄の固い意思を翻らせるというきわめて困難な最後の仕事に失敗した時、ホメロスは、つまるところ悪しきダイモンに反対されたからなのだと語り、テレマコスが、女々しい若者から雄々しい英雄に幸せな変容を遂げた際にも、やはり同じく、つまりは神の恩寵によるのだと了解しているが、このように、ギリシア人たちが思い描いて達成した偉大な教育理想のすべてに認められるのは、定量化できない神的要素に対する豊かな自覚にちがいない。そのような自覚は、ピンダロスとプラトンという二人の偉大な貴族主義者にわけても鮮明に見い出されるのではなかったか。

『オデュッセイア』の第一巻では、アテナ自身が、メンテスに扮してテレマコスに助言するにあたり、そうした助言をはっきり「教育」と言明していた。その助言は、テレマコスの決意を固いものにして、当人は、自らの権利を主張し、求婚者たちに公然と抵抗して集会でのしかるべき釈明を求め、いまだに帰らぬ父親の捜索に皆の援助を仰ごうと決心した。かれの第一の計画は、しかしながら惨めに失敗し、集会の賛同も得られなかったから、かれは、自分一人の手で事を処理しようと思ひ、ひそかに、危険きわまりない旅に出たのだが、その旅は、幸いにも当の本人

を一人前の大人に仕上げてくれた。ここでの決意と旅は、それゆえ、当の本人を「真に育て上げた」という意味で、「テレマコスの教育（テレマコウ・パイディア）」と呼ばれるふさわしく、その中では、かれの魂を舞台にあまねく教育的要素が、しかるべく活動をはじめていた。すなわち、経験に富んだ年長者は、テレマコスに助言を与えて正しく導いたし、テレマコス自身は、母の愛の穏やかなエネルギーをひしひしと感じつつ、母親はしかし、あまりに一人息子の安全を願いすぎて、相談されてよい折にもそうされなかった——息子の突然の決意に共鳴できなかったろうし、不安に駆られて邪魔するしかなかったらうから——し、息子の方は、偉大な父親の記憶を自らの前面に絶えず掲げていたし、さらには、家あとに旅に出て、友好的な宮廷を訪れ、さまざまな世界や人びとの生活を目にしたし、助言と援助を乞うべく偉人たちと交わって励まされたし、あるいは、新しい友を作り、新しい支持者を見つけた……。そのような期間を通して、ひたすら神は親切に介入し、一方ではかれの人生を設計し、他方では危機に際して味方したから、その身は存分に保護され、その道は存分に平坦化された。われわれとしては、ギリシア世界の境界に位置する小島の小領地の小地主の息子として育てられたテレマコスが、見知らぬ世界に足を踏み入れて偉大な王子たちの歓迎を受け、どれほどの当惑を覚えたかをありありと目にできるにちがいない。しかも詩人は、テレマコスが、足を運んだあらゆる場所でいかに広い共感を手にしたかを描いて、身に付いた健全な訓練と規律が、尋常でない危険きわまる状況下でも決して当人を見捨てなかったこと、そして、父親の輝く名声が、当人の困難な道のりをいっそう歩み易くしたことを、見事に示したのだった。

ところで、貴族文化の知的原理を論じようとすれば、わけでも重要なある点にいっそう細かい注意を払わなくてはならない。教育において「実

例」がいかに大きな役割を果たしているか——これが、つまりはその点といえるだろう。はるか昔、法典類も倫理体系もいまだ存在せず、生活上の行為を律する基準としては、いくばくかの実践的な宗教的命令か、世代から世代に手渡されるあまたの格言的知恵しかなく、それらを除くと、個々人の難局を切り抜ける上で最も効果があったのは、昔日の手本的な英雄たちの生き方であった。環境が与える——とりわけ「両親」という手本が与える——直接の影響なら、思うに、テレマコスやナウシカなどの人物にしかと目にされるだろうが、そうした環境に劣らず強力な影響を与えたのは、古い伝承に描かれた夥しい「模範としての生き方」にほかならない。そのような伝承は、今日の世界で「歴史」——バイブルの語る歴史も含めて——が果たしている機能を、ほかでもない初期の社会で果たしていたのである。諸々の冒険譚には、あまねく新世代が受け継いで、豊かな靈感を汲み上げてきた精神的富がたつぷりと含み込まれていた。たとえば『イリアス』に登場するアキレウスの師は、偉大な

会話の中で、メラグロスという戒めの実例を取り上げたし、『オデュッセイア』におけるテレマコスは、一人前の大人としての訓練の只中で、模倣するに足る適切な人物をモデルに掲げていた。真似るべく掲げられた手本は、いうまでもなく、父親を虐殺したアイギストスとクリュタイムネストラに堂々と報復したオレステスであったが、当人の報復行為も、英雄の帰還をめぐる悲劇中の無数の挿話の一例にほかならない。アガメムノンには、トロイから帰還して直ちに命を奪われたが、オデュッセウスは、はるか故郷を離れて二十年も漂流したから、双方の時間のズレはまことに大きく、ゆえに詩人は、ポキスに向けたオレステスの逃亡とその報復を、『オデュッセイア』の開始期より早い時期に設定しなくてはならなかった。かれの報復行為は、なるほど近々のものであったが、その評判は、すでにギリシア中に知れ渡っていて、ゆえに女神アテナも、熱烈

な言葉でテレマコスにその評判のほどを示すことができた。伝承から借り出された実例は、ほとんどが神々しい太古に属して、それゆえ、自らの権威を誇ってもいた——たとえばポイニクスは、アキレウスに語りかける際にも、古き時代と英雄たちへの尊敬をしきりに要求している——が、オレステスの状況は、これとは違って近々のことで、テレマコスの置かれた状況とも似通っていたから、同じ実例ながら、当人の模倣意欲をいっそう掻き立てたのは「否めない」。

このようなモチーフ（誘因）がどれほど大きな重要性を秘めていたかは、詩人もはつきりと表明していた。女神アテナは、テレマコスにこう語りかけている、「あなたはもはや子供のように生きてはなりません。そう生きるには歳を取りすぎているのだから。かつてオレステスが、父親を殺した裏切者のアイギストスを打ち滅ぼして、いかに世間から大きな名声を勝ち得たかを耳にしたことはあるはずです。わが友よ、あなたも同じく——どれほどに容姿端麗で力強いかは十分に知られているのですから——雄々しく振る舞って、のちの世代の称賛を博さなくてはなりません」と。このような助言も、オレステスという実例がなかったら、そもそもその基準を欠いて、とうてい重みと確かさを持たなかったにちがいない。求婚者たちへの力の行使を決意する困難な場で、女神は、テレマコスの優しい心根を揺り動かすべく有名な実例に訴えたが、それは、二重の意味で必要であった。すなわち、この作品の冒頭に登場する神々の集会で、詩人の描く大神ゼウスは、天罰という道德問題に触れるにあたり、アイギストスとオレステスという実例を引き合いに出していたが、詩人は、これによってアテナのちに、この実例に触れるのを正当化——わけても敏感な良心の持ち主にさえ——したのだった。加えて、話の筋が展開していく中で、生命をもったこの実例はくり返し引用され、その都度テレマコスに強い影響を与えて、当人を、定められた使命に向けて

教育した。たとえばネストルは、アガメムノンとその家系が辿った悲惨な運命をテレマコスに語りながら、突如それを中断し、テレマコスの真似るべき手本は、ここでのオレステスを描いてないのだ、と指摘すると、テレマコスは、これを承けてこう答えている。まさにその通りで、オレステスは立派に復讐を遂げましたから、アカイア人たちは、かれの名声をあまねく世に広めて、のちの世代にも末永く知らしめるでしょう。願わくば神々が、わたしにもそうした強さを授け給いて、求婚者たちの卑劣な犯行にしっかりと復讐させ給わんことを！、と。オレステスという事例は、ネストルの会話の終了部でもくり返し触れられている。すなわちネストルは、この事例に二度も——長い会話の前半と後半の終わりで——、かなり強い口調で、テレマコスの状況に当て嵌めながら、触れているのである。

このような繰り返しは、あくまでも意図的になされていた。貴族社会の倫理や教育があまねく共有していたもの、それは、有名な英雄や伝承的状况といった「実例」に訴える基本姿勢であった——こう詩人は、考えていたからである。そのような基本姿勢については、これが、叙事詩を理解する上でいかに助けとなるか、また、初期社会の基盤にいかにか深く根を張っていたか、を示す箇所でも改めて論じることにして、のちのギリシア人も、やはり同じく「パラダイグマ（模倣すべき手本）」を、自らの人生と思想を導く基本のカテゴリーとみなしていた。たとえばピンダロスは、神話的実例を「勝利の賛歌」の本質要素として多用しているが、これを挙げるのみでも、上の証拠としては十分にちがいない。こうした基本姿勢は、あまねくギリシアの詩に——そして何らかの散文にも——広く浸透していたが、それを、単なる文体的技巧にすぎない、などと解説するのは間違っている。これは実に、古えの貴族倫理の紛うかたなき本質に属して、教育的にも重要であったから、初期の詩でも頻繁にみら

れて、神話的実例の真の意味は、しばしば、ピンダロスの詩にもそっと顔を覗かせていた。われわれがもし、プラトンの哲学全体が「類型」という観念の上に構築され、当人は、そのアイデアを「実在の領域に樹ち立てられた類型」と記述していたのを思い出すなら、そうしたカテゴリーの起源も、きわめて容易に見抜けるのではないだろうか。すなわち、「善」のアイデア（より正確には「アガトシ」のアイデア）という普遍妥当な類型は、英雄的なアレテーという、古えの貴族規範を形造っていた手本の直系の子孫にほかならない。アルカイック期の教育原理とプラトン哲学の間には、そして、プラトン哲学とピンダロスの間には、まさしく一本の展開の線——必然の流れに沿った、有機的で、途絶えることのない——がくつきりと目にされるにちがいない。それは、歴史家の面々がしばしば用いる半ば科学的な意味での「進化」などではなく、歴史のあまねく変転を通して基本的に同一の中身を保っている、あのギリシア精神の最初期の様式に認められた本質要素が、徐々に華を開いた「所産」にほかならない。

#### 訳者あとがき

ここに紹介する和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA —— Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な G・Highet, PAIDEIA —— the ideals of Greek culture ——, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯も



あって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が、様変わり、するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、

双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。今回は、紙数の制約もあって、「ホメロス世界の貴族たちの文化と教育」のみを掲載することにした。

(本学非常勤講師)